

profile

くらもち・みか●1970(昭和45)年、東京都生まれ。美術大学で産業デザインを学んだ後、1992(平成4)年に(株)長谷工コーポレーションにデザイナーとして入社。野村不動産(株)との共同プロジェクト「OSEKKA」や可動式クローゼット「UGOCLO」の開発などに参加。2017年、デザイン室長に就任し現在に至る。



デザイン室で長年苦楽を共にしてきたふたりのメンバー

「昔から、街中で素敵なショーウィンドウを見掛けたときに感動することが何度もありました。そういった感動の瞬間を自分でも生み出してみたいと思ったのがはじまりでした」

「昔から、街中で素敵なショーウィンドウを見掛けたときに感動することが何度もありました。そういった感動の瞬間を自分でも生み出してみたいと思ったのがはじまりでした」

「住まいとしての建物は一生残るもの。永く住まう邸宅を創りたいと思って『これだ』と決めたところが、ここ、長谷工コーポレーションでした」

形に残るもので、感動を

中高生の頃から、絵を描くことやデザインすることに興味があったという倉持。このデザイン・アートへの関心から美術大学に進学した。本格的に将来の仕事を考えるようになる頃、最初は空間のデザインをやってみたいと思っていたという。

「建築出身の方とアプローチの仕方が全く違うと感じました。でもそこで『違うよ』と言われたことがないんです、私。『そんなふうに考えるんだ!』『面白いね!』とお互いの意見を尊重し合う雰囲気は、自らのことを考えるとき、設計者は、まず建物の形や機能を考えるのが一般的だ。しかし倉持は、見る人がどう感じるかを重視し、色や素材の与える印象などを起点としてデザインを考えた。双方のアプローチは全く異なるが、一方のみが正解ではなく、どちらも必要な視点。それぞれがお互いを尊重するからこそ、チームはどんな意見も「面白い」と受け止め、発表させることができたのだろう。倉持自身も「本当に毎日が面白かった。のびのびやらせてもらっ

デザイナーの私は「異質」だった

当時、同社の設計グループには美術大学出身者がほとんどいなかった。一方会社としては、単なる設計だけでなく、アートやデザインの視点を積極的に取り入れていこうと進化を望んでおり、その先駆けとして倉持が加わることにあった。先輩は現代表取締役会長である大栗育夫氏をはじめとする設計のプロフェッショナル集団で、倉持は美大卒一年目のデザイナー。意見の対立もありそうに思えるが、意外にもそのよう

輝け! けんせつ小町

デザイン

倉持美香

株式会社長谷工コーポレーション エンジニアリング事業部 デザイン室 室長



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



my Beginning

私が建設業に入った理由

感動の瞬間をデザインで



上/可動式クローゼット「UGOCLO (ウゴクロ)」は、家族の成長に合わせて居室の広さが変えられるシステム。女性一人の力でスムーズに可動する。倉持もデザインに携わった。  
 左上/女性チームが開発した洗面化粧台「ドレッサーⅢ」。扉を開けずに出し入れできるオープン棚、ダストボックスや着替えの位置にも配慮。「実際に使う人の視点」で収納からデザインした商品だ。  
 左下/様々なメーカーの扉がズラリと並ぶLIPSの一角。来訪者は多くの商品を一度に比較できる。



様々な材質や色の見本をたくさん並べて眺めているときに、倉持が一番楽しい時間だという。

# my Growing

私が建設業界で学んだこと

## インプットは日々の生活のなかから

その後も手掛けた仕事でグッドデザイン賞を受賞したり、女性だけのチームで新商品の開発に挑戦したり。近年ではインテリアに強みを持つ女性社員の育成に会社全体が力を入れており、デザイン室では女性の部下もグッと増えた。室長となった倉持は、マネージメントも行う立場だ。部下からは「上司ですが、お姉さんのようでもあります」と言われるほどに慕われている。そして、多面的な視点を持ち、多方面に成長を遂げてきた彼女の集大成が新生LIPSだ。コンセプトは「一周すれば、マンションが一棵できちゃう」。事業主とマンションの内装・外装などの各仕様を決めるためのプレゼンテーションスペースで、様々なメーカーの実物見本が並び、それらを比較検討することができる。「ただのショールームだけではない建築物としての美しさを感じてもらえるようなLIPSを創りたかった。驚きと感動を与えられる素敵な空間を目指して、デザインをしました」

楽しんでもらえる空間を目指すからこそ、彼女は普段からインプットにも余念がない。「ただ歩いているときも、カッコいい建物や素敵なインテリアがあったら、つい写真を撮っちゃいます。あの素材は使えそうだな、色の組み合わせは新しいなと、四六時中考えるんですよ」。

### 二四時間、今いる場所がインプットのチャンス

ただ機能していればよいというわけではなく、人が目にするところならば、楽しく見てもらえるように。それが彼女の考えるアートやデザインの根底にあるものなのかもしれない。

嬉しかったですね」

「さみしいから、絵を描きましょう」と提案しました。美大の同級生たちを集めて、仮囲いに絵を描いて、街に巨大なアートを出現させました。歩いている人が思わず見上げていたのは、嬉しかったですね」

ていました」と笑顔で語る。

**機能するだけじゃ感動できない**

倉持はデザインの役割を「設計に付加価値を与えるもの」と言い表す。安全で機能的につくられているのは当たり前。そこから、いかに使う人の記憶に残るもの、「これいいね」と感動してもらえるものにしていくのか。形状、色、素材など、使う人の気持ちを考えて、総合的により良いものを目指していくのがデザイナーの仕事だという。彼女はその重要性を、初めての仕事で、自然と実践することができていた。

倉持が自ら申し出て担当となった、入社後の初仕事。それは建設中のマンションの仮囲いに、大勢のアーティストが絵を描くことだった。当時は白くて殺風景なのが一般的だった仮囲い。しかし倉持には、それが「つまらない」と感じた。街行く人も目にするのだから、どうせなら楽しいもの、感動できるものにと考えた。



デザイン室の部下ふたりと資料を眺める。室長になる前からの同僚としての期間が長く、とても頼りにしている右腕・左腕だという。

### my style

お休みには必ずといっていいほど、美術館めぐりをします。特に花見シーズン、紅葉シーズンの美術館めぐりは最高！これだけは誰も誘わず、ひとりの時間を堪能します。四季を感じるのが好きなので、街の植物を眺めたり、ウィンドウディスプレイを楽しんだり、いろいろなものを吸収しています。



「ゴッホとゴーギャン展」(2016年、東京都美術館)では、絵の中にある椅子が飛び出したかのような展示の方法に感動しました。

そして、多彩な素材や色を机上に置いて眺めていると、ふとひらめく瞬間がある。普段からアイデアを蓄積しておくことで、インスピレーションが生まれるのだという。「材料と色がつながる瞬間があるからやめられないんです」と、デザイナーの醍醐味を語ってくれた。

今回訪れたLIPSは、単なる商談の場には収まらない空間だった。きっと倉持が昔からストックしてきたアイデアや理想が思い切り詰まっているのだろう。倉持のこれまでを象徴するかのように、そして来訪者にとって、ここへ来た経験自体が素晴らしいものになるように、感動がたくさん生まれる空間そのものを、彼女はデザインしているのだ。

**my Growing** 私が建設業界で学んだこと